

祇園祭の山鉦祭礼をめぐる祭縁としての社会関係 ——祭を支える人々——

樋口博美

Social Relations Brought by Festivals (*Matsuri-en*): Observation in People Involved with Ritual (*Yamaboko-Junko*) of Gion Festival

HIGUCHI, Hiromi

要旨：本稿は、祇園祭山鉦巡行の実現と維持にかかわる人々に焦点を当て、そこで取り結ばれる関係を「祭縁」として考察し、その全体の概要を捉える図式の提示を試みたものである。山鉦を「建てて、動かす」ことをめぐり、どのような人々がどのように関係するのかという関心から、祭礼にかかわる人々と諸集団を①祭へのかかわり方、②空間、③時間、④伝統の視点から記述・考察している。①祭へのかかわり方を、祭礼の実現・維持に向けた機能の観点から、企画とその運営の役割を担うもの（山鉦保存会、町内在企業、通い町衆、山鉦連合会）と、技能によって実動する役割を担うもの（手伝い方、大工方、車方の作事三方）に分類した。それぞれを②空間、③時間、④伝統の視点でみると、前者は、その集団構成を変えつつも祭礼の基点となる町会所周辺に生活基盤をもち、祭礼にかけける時間も長いという特徴で括られる。これを「企画・運営をめぐる祭縁」とした。後者は、やはりその集団構成を変えつつあるが、町会所から離れたところに生活基盤のある祭礼時期に限定的な関係であり、祭礼にかけける時間も少ないという特徴で括られる。これを「技能・実動をめぐる祭縁」とした。異なる役割と社会関係をもつ二つの祭縁は、山鉦巡行という至上命題を実現するにあたり、互いに必要不可欠な関係として結ばれる。これを都市的祭縁として明らかにした。

キーワード：山鉦祭礼、町会所、企画・運営をめぐる祭縁、技能・実動をめぐる祭縁、都市的祭縁

はじめに

日本三大祭の一つに挙げられる祇園祭は、京都の夏の風物詩であり、千年以上にわたって続いてきた伝統的な祭である。特に毎年7月17日に行われる祇園祭の山鉦巡行の祭礼は、32基の山鉦が京都の中心街にある四条通を東進したのち河原町通を北上し、最大の観覧地点である御池通を西へ向かっていくものであり、多くの見物客を引きつける。そして「祇園祭」と聞けば、たいていの人々は当日テレビ等に映し出されるこの山鉦行列の姿を思い浮かべるに違いない。しかし、現在祇園祭の象徴ともいえるこの山鉦が文書記録に現れるのは、朝廷主催による祇園会が始まってから四世紀近く経った南北朝時代のことである。本来、祭の中心は八坂神社から出る3基の神輿であり、それに付随する13本の馬上鉦、5匹の神馬、獅子舞、巫女の神楽・田楽などから成る神輿渡御の神幸行列であった¹⁾。南北朝の戦乱期に自衛しなければならなかった町人たちが、結束力を高めて町ごとに共同体を作り、その結束の象徴として始めたものが山鉦巡行（脇

田1999:169)であり、もともとは神輿行列を迎えるための町の人による自主的な歓迎パレードであった。山鉦巡行は神輿渡御を中心とする神事に新たに追加された、祭礼を盛り上げる工夫としての「風流」であったのである。現在でも祇園祭は、神輿渡御と山鉦巡行の二つの祭礼によって一つの祭として成立しているのだが、祭の本来の中心的神事である神輿渡御以上に、その絢爛豪華さと、また京都観光の目玉としての宣伝効果から、山鉦巡行の方が全国的にも知られた存在となっている。

本稿では、歴史発祥的にも、継続性という観点からしても町の人々の自治性がより高い山鉦巡行の祭礼に焦点を当て、その祭礼を維持するにあたって結ばれる社会関係を「祭縁」²⁾として考察し、その全体の概要を捉える図式の提示を試みる。その際、祭の主催として注目される町内の人々や諸集団だけではなく、(町内を基点として)町外にも展開される関係、つまり祭礼に関与する町外の人々や諸集団にも着目する。前者と後者のそれぞれが、祭礼を実現・維持するにあたり、何を契機に祭縁を形成するのか、また両者が互いにどのような関係にあるのかを明らかにしたい。そこで、始めに本研究の分析枠組みを提示し(1)、祭礼の維持・遂行にあたって、町内やその近辺には、どのような役割を担う人々や諸集団

受稿日2012年1月11日 受理日2012年1月30日

1 専修大学人間科学部社会学科 (Department of Sociology, Senshu University)

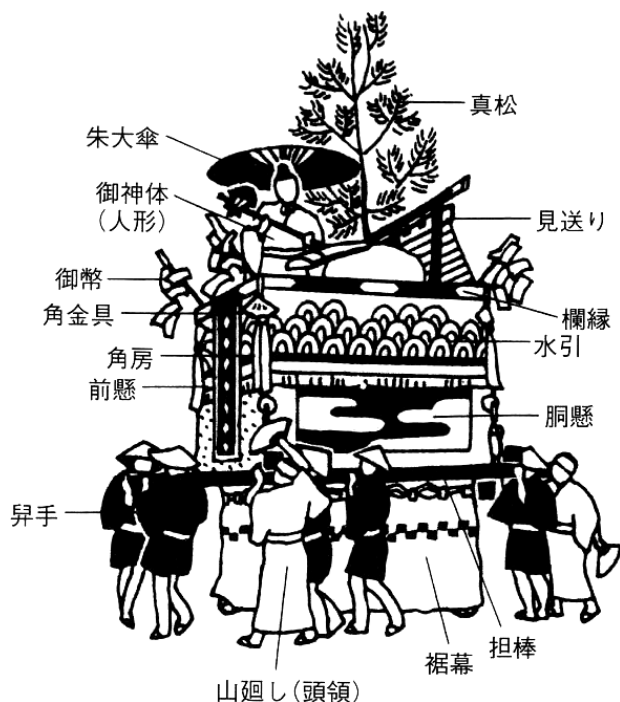


図1 山鉾祭礼の山

出典：京都市観光協会パンフレット『祇園祭』より

が存在するのか(2)、また町外ではどのような役割を担う人々や諸集団が存在するのか、特に技能的な集団に着目しながら記述する(3)。それぞれの特徴を考察した後、祭礼全体のために結びばれる祭縁がいかなるものであるかを明らかにする。

1. 山鉾祭礼の経緯と分析枠組み

1-1 町衆の祭としての山鉾祭礼

祇園祭は八坂神社の夏祭である。はじめに述べたように、祇園祭には神輿渡御と山鉾巡行の二つの祭礼があり、この両方が八坂神社に属す氏子たち³⁾によって担われるが、祭の本来の中心は神輿渡御である。しかし、山鉾巡行が室町時代に台頭してきた町衆によって始められて以来、それは町の自治を象徴する町の人々の祭として発展してきた⁴⁾。現在、山鉾巡行は氏子地域のなかの32の町内によって実施されているが、この32町が町ごとに一つの山もしくは鉾を所有しており、このような山鉾を持つ町が「山鉾町」と呼ばれる。

この山鉾町には、山（人が担いで歩くもの：図1）を所有する山出し町が23町、鉾（車輪がついており綱をつけて曳くもの：図2）を所有する鉾出し町が9町ある⁵⁾。

毎年祭の時期になる度に、車輪部分、胴体部分、舞台・屋根部分などの各部材を町の収蔵庫から取り出して組み上げ、そこにご神体や榊、紙垂などの神事に関する

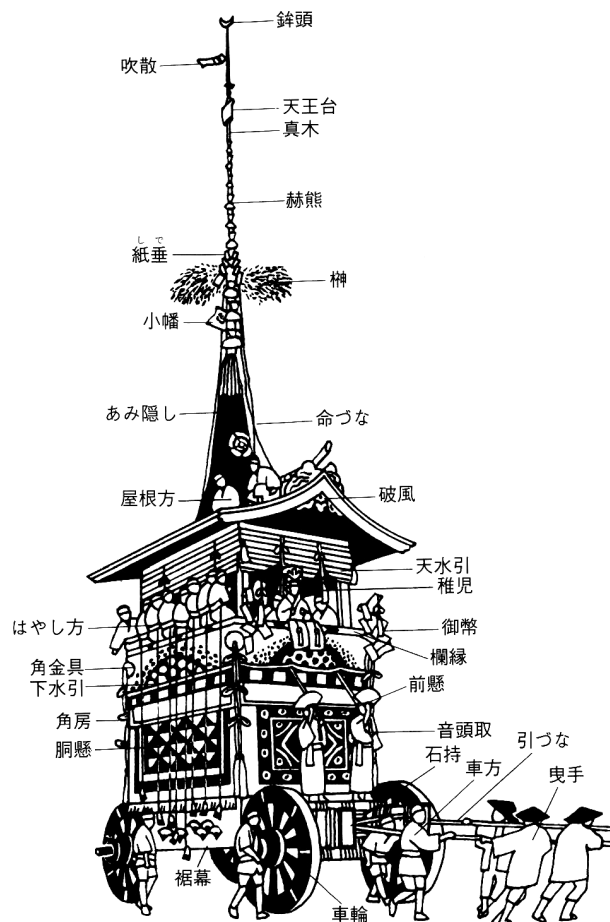


図2 山鉾祭礼の鉾

出典：京都市観光協会パンフレット『祇園祭』より

装飾や懸装品を掛けて山鉾は完成となる。そして、巡行が終わると部材は全て解体され、再び収蔵庫に収められる。

図3は、山鉾32基の所在地を示した地図である。京都の「町」は、両側町と呼ばれる独特の形をしており、通りを挟んだ向かい同士の家々で一つの町が形成されている。したがって町内から出される山や鉾は、この向かい合った町内の間の通りに、ちょうど町内の真ん中に建てられることになり、鉾を挟んだ両側で一つの町という具合になる。

全ての山鉾町が市内中心部に集中しており、この辺りが八坂神社の氏子のなかでも特に富裕層が集中していたところであるということが、山鉾町の本来の性格を物語っている。自分たちの町から自力で山や鉾を出すということは、相当な財力がなければ到底不可能であったし、山鉾を出すということは、「町衆の心意気」を見せつける絶好の機会であったにちがいない。町衆の心意気のみならず教養や財力を示すといわれる山鉾は、応仁の乱(1467年)以前には58基あったといわれ(1500年の再興

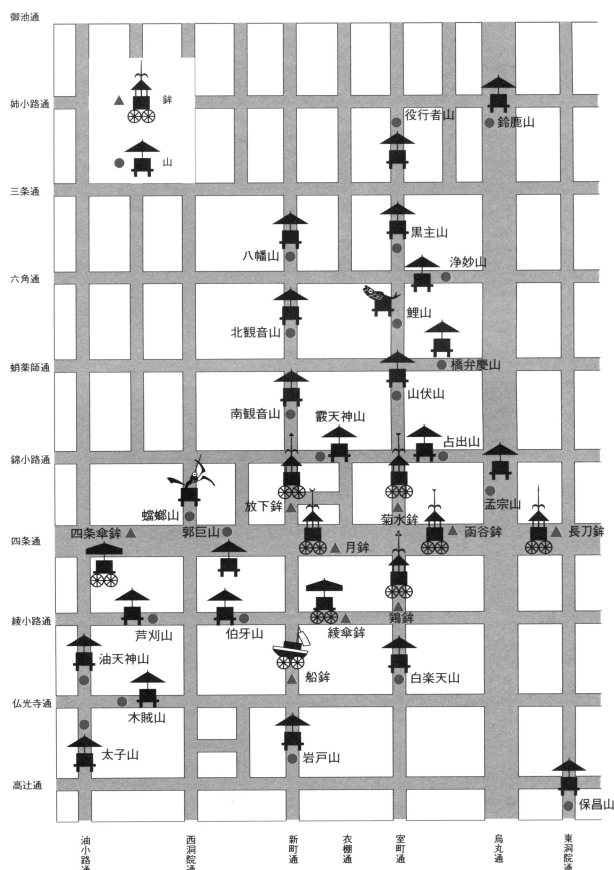


図3 山鉾所在地図

出典：『祇園祭の美』p.147より

時には36基となった)、それぞれの山鉾が伝承や故事をもっている。日本の神話や伝説をもとにしたもの、中国の史話や故事に因んだもの、修験道を主題にしたもの、能や謡曲を題材にしたものとお題は多様で、これが町衆の教養の反映とされるゆえんである。町内それぞれのご神体を乗せた山鉾を飾るのは、前掛けや胴掛け、水引(図1, 2を参照)に施された染織、毛綴をはじめ彫金、木彫、塗りなどの丹念な匠の技が施された懸装品・装飾品の数々であり、山鉾そのものが「動く美術館」と表されることもある。これらが町衆の財力の象徴でもあった。

その町衆たちの神事と山鉾町の経済を近世を通して支えたのが、豊臣秀吉によって天正19(1591)年に創設されたといわれる「寄町制度」であった。これは、山鉾町以外の町が地之口米と呼ばれる一定量の米もしくは金銭を(はじめは米だったが、後に金銭となる)負担し、時には諸役の奉仕によって山鉾町の山鉾祭礼を援助する制度(いわゆる協賛会)であった。さらに明治5(1872)年に廃止された寄町制度に代わり資金援助の目的で結成されたのが、八坂神社の氏子たちによる協賛組織の清々講社であった⁶⁾。山鉾祭礼は町衆の力だけでなく、町外からの人的、経済的援助や協力を得ることで長い歴史のなか存続してきたのである。

戦後、山鉾町の在る地域は、京都市内でも屈指の商業地であり繁華街でもある四条河原町に近接していたことからその近代的な商業化の波に押され、建物のビル化・高層化、居住住民の激減、高齢化が進み、山鉾祭礼は常に変化を余儀なくされ、揺らぎ続けてきた。ついには夜間人口ゼロという町が現れることになる。祭礼実施のための仕組みも、祭を支えてきた人も、そしてそこにあるコミュニティも変化せざるを得なかったのはいうまでもない。にもかかわらず、毎年夏になれば、祇園祭の山鉾はいつもと変わらぬ堂々たる威容で見物人の目を楽しませ、神事に華を添える。その背後には、祭を支える人々によって繰り返される日々の営みがあり、そこに蓄積された、あるいはそこで新たに構築される社会関係が網の目のように張り巡らされて、「毎年変わらない」祭を実現させてきたのである。

1-2 山鉾祭礼をどうみるか——分析枠組み——

本研究の関心は、この山鉾を実際に建てて、動かすことをめぐる社会関係にある。つまりさまざまな部材や懸装品といった「もの」を使って、「山鉾を建てて、動かす」ことをめぐり、どのような人たちがどのように関わっているのか。そこに見いだされる祭礼維持のための仕組みを「祭縁」として考察する。特に山鉾祭礼の実現・維持に対して、町内を中心とした日常的・持続的なかわりだけでなく、町外からの集中的・限定的なかわりも重要である。本稿では町内と町外の両方の関係によって祭礼が実現・維持されていると捉え、記述・考察を行っていく。

そこで、祭礼にかかわる人々や諸集団を捉える視点として①祭へのかかわり方、②空間、③時間、④伝統の四つを挙げる。①の祭へのかかわり方は、祭礼に対してどのような役割・機能を担うことで人々や諸集団の関係は存在するのか、彼らは何を契機に結びつくのかという点に着目するもので、これによって祭縁としての社会関係のあり方を導き出す。ここでは、山鉾祭礼の実現・維持にあたって、企画・運営にかかわるものと、技能・実動にかかわるものの二つに分類されることになる。そして①の祭へのかかわり方を規定する要素として次の②と③がある。②の空間とは、祭礼にかかわる環境についての指標である。祭礼にかかわる人々が山鉾町から、もっと具体的にいえば祭礼にかかわる人々が必ず集まる町会所(山鉾が建てられる位置)からどのくらいの距離に生活基盤を置いているのかという点に注目するものであり、特に町内にあるか否かが一つの目安となる。③の時間と

は、祭礼にかかわる頻度、さらに単純化していえば総時間量についての指標である。人々の祭礼とのかかわりが、祭礼時期以外の日常のなかにどのくらいあるのかという点に注目するものであり、日常的・持続的關係なのか、それとも祭礼時期の集中的・限定的關係なのかを含め、祭礼にかかわる頻度と時間の多少が焦点となる。④の伝統は、祭の維持という至上命題を果たすために、祭礼にかかわる人々や諸集団がその關係のあり方を、歴史的推移のなかで変化する状況に応じて、さまざまに変容させてきた側面を捉えるもの（個々の集団の特徴を捉えるための視点）である。本研究では、これらの枠組みに従って、山鉾祭礼を支える人々および諸集団についての記述・考察を行う。

本論中の祭礼に関する記述は、筆者が2011年の山鉾祭礼期間中、または祭礼後に行った関係者への聞き取りと既存の記録資料をもとにしたものであり、その限りにおいて諸事實關係を整理し、提示したものが本稿である。

2. 祭礼を運営する人々と諸集団

ここでは町内を中心とした祭礼維持のための祭縁集団について考察する。まず、日常時・祭礼時を問わず、祭にかかわる人々の拠り所である「町会所」について述べる（2-1）。町会所は、本稿で祭礼にかかわる人々や諸集団を考察する際の分析指標の「基点」となる。次に、山鉾祭礼を担う人々の集まりである「山鉾保存会」を取り上げ、町内会との關係にも触れながら、祭礼を企画・運営することを契機に取り結ばれる關係について記述し（2-2）、最後に各保存会の集合体である「山鉾連合会」について述べていく（2-3）。

2-1 「集合点」、「起点」、「財源」としての町会所

町会所は、山鉾祭礼にとってあらゆる意味で重要な「場」である。町会所の役割を、祭礼に必要なあらゆるものや人が集まる場（集合点）、祭礼に関するあらゆることを始める場（起点）、さらには祭礼維持費を生み出す場（財源）であることを以下で確認する。

町会所は、町内もしくは各山鉾保存会が所有・共有する集会施設・共用施設で、町家^{ちやういえ}とも呼ばれる。江戸時代には京都のほとんどの町でみられた施設であり、近世都市における町方の寄合の場、町年寄などの町役人が町務をとる場でもあった。現代でいうところのコミュニティセンターである。近代になって行政組織が整備されると町会所の役割は薄れ、さらに町内での不動産共有という所有形態が認められなくなったことから町会所が次々

と姿を消していった。しかし祇園祭の神事が行われていた山鉾町の町会所は、祭礼専用施設として残されて今に至り、現在町会所が集中的に残っているのはこの山鉾町界隈だけであるという（谷1994：65－85）。

現在、町会所がどのように使われているのかを見てみる。

まず、祭の始まりである。祭礼期間の初日7月1日は神事始めの吉符入りの日である。各山鉾町では町会所に関係者が集まり、祭礼や神事に関する打ち合わせが始まる。打ち合わせは吉符入りの日以外にも行われ、その度に町会所には人が集まることになる。町会所は祭礼をめぐる人々の集合点となり、そして祭礼の起点となっている。

吉符入りの後、本格的な準備期間に入ると、町会所には巡行当日に山鉾に乗ってお囃子を担当する囃子方の人々が集まり、祇園囃子の稽古が始められる。また、祭に來た人々に授与するちまきに札や飾りをつけて袋詰めする作業も町内の住民が町会所に集って作業を行う。さらに、山鉾巡行のおよそ一週間前からは町会所の前に山鉾が建ち始める。山鉾を建てるための部材や道具が集められ、山鉾を建てる作事方（後述）の人々が早朝から集まってくる。山鉾の組み立てが終わると、最後に町内の人々が集まり、懸装品を取り付け、山鉾の完成を見る。

祭期間中、町内の宝物として伝わるご神体や懸装品・装飾品などを展示する会所飾りもまた、この町会所で行われる。町内の宝物が集まり、展示され、宵々山、宵山、巡行当日と町内から観光客まで多くの人が集まる場所となる。巡行当日、保存会の人たちが交代で詰めて、祭を執行し巡行を見守るのもこの場所である。

夜間人口ゼロとなった町内でも、祭の時期になると町会所を集合点として人が集まり、ここを起点に祭礼の準備が始められ進められていく。

さらに町会所のもう一つの重要な役割は、祭礼運営のための費用確保である。町会所は財団法人山鉾保存会の共有財産である。そこで町会所をもつ多くの山鉾町が、日常的には事業所、店舗、住居として町会所の一部を賃貸し、その賃貸料を祭礼に充てている。もちろん、祭礼費の全てを賄うことが出来るわけではないが、祭礼運営のための財源という点では大きな役割を果たしており、保存会にとって資金工面の大きな柱となっている。町会所はこのように人、もの、資金を集め、祭の企画、調整、準備をはじめ、遂行する場である⁷⁾。ここで説明した「町会所」をこれ以降の考察の「基点」としたい。

2-2 山鉾保存会を構成する人々 ——町内在企業と通い町衆——

南北朝期以来、町衆による町共同体が主体となって行われてきた山鉾祭礼であるが、明治以降の財政難を機に町ごとに組織されたのが「山鉾保存会」である。したがって、「町内会と保存会は一体という感じもする…」という声も聞かれるほど町内とはもっとも近い関係にあり、構成員は重複するものの、町内会とは会計管理をはじめとして完全な別組織となっている。たとえば多くの町内会では、町内会長は1年交代が不文律となっているが、保存会の会長はほとんど替わらないという。

また、大正11（1922）年に放下鉾（小結棚町）が財団法人化されると、戦前には3町、戦後昭和30年代～40年代には多くの山鉾町で財団化が進み、2012年現在までに23町が財団法人の形を取っている⁸⁾。

保存会では、巡行の順番を決める籤取り式への参加に始まり、祭の無事を祈願する社参や、町内での清祓といった神事にかかわるのはもちろん、鉾建て・巡行のための資金面、人材面、物質面の段取り、調整、手続きといった事前の準備、巡行当日の祭礼の運営、巡行終了後の部材や懸装品の点検、修復など、「鉾を建てて、動かす」ことに向けた段取り・運営の全てを行う。保存会には市や府、関連諸団体からの補助金や寄付金が毎年交付されるが、これらの配分など検討を要する事項や内容もある。

繰り返しになるが、保存会は山鉾維持と祭礼運営のみを目的に、山鉾町ごとに組織された町内の団体である。ゆえに、以前の保存会は町内会とほとんど重複していて、町内会主催で祭礼が運営されているといってもよかった。祭礼に中心にかかわらなくとも、たとえば、ちまき巻きや懸装品の掛け外し作業、鉾建ての際の真木立て（写真1参照）の作業は町内の年中行事の意味も持っていて、これらへの参加が人々に町内の祭であることを自覚させてきたのであろう。しかし、現在では人手不足も手伝い、以前に比べるとこのような町内ぐるみの作業は減り、町内の人々が祭礼にかかわる度合いは低くなっている。

現在、山鉾保存会のもとでは必ずしも町内在住の人々だけが祭に携わるわけではない。ここで、鶏鉾（鶏鉾町）における町内会と保存会の構成メンバーとその関係について述べられた保存会理事長K氏の話を見てみる。

現在の町内の夜間人口は5世帯9人である。この5軒を含めて財団法人鶏鉾保存会に携わっているのは町



写真1 真木立て（筆者撮影）

内に11軒である。町内在住以外の人、会社を持っている人や貸家人をして自分は余所に住んでいる人（住んでいないが、鶏鉾町内に土地と貸し家がある）などである。

他に保存会のメンバーとして、今年4月に東京から来て、町内に店舗を構えて商売を始めたM氏は、早速「祭に来て、楽しいー（笑）てゆうて」参加してくれている。また、従業員200名を抱える企業の総務部長U氏も役員として保存会に、そして祭に参加している。U氏の前は「社長の次の人（ナンバー2という意味）」が来ていた（必ず誰かが代表して参加してくれている）。また、町内に大きなビルがあるが、ここは30ほどのテナントを分譲販売したビルである。したがって、いわゆる「家主」がたくさんいるが、ここからはビル全体の代表で一人の人が財団法人鶏鉾保存会に参加し、祭に来ている。

一方、鶏鉾所有の町会所ビルの3階は病院、1階には美容室が入っているが（※町会所はビルの2階部分）、保存会のメンバーには入っていない。忙しくて祭の手伝いはできないようだ。最初は皆、山鉾町内にいる店舗などのテナントに入るのに心配の声をあげる。山鉾町のテナントに入ったら祭の手伝いなどしなくてはならないのでは、と考えるようだ。しかし、祭に参加しなくても結構ですよといっている。住んで、やりたければやっていただければよい、というスタンスでいる。会社でも町内会費は払ってもらう。（財）保存会に

入る・入らないは自由だけれど、財団に「入ったらきっちりやってもらわなあかん」と思っている。(鶏鉾町保存会理事長 K 氏 (78歳) 談)

ここから、保存会の成員が大きく三つに分けられることがわかる。まず現在町内に居住する者、次に町内に店舗やビルを構える企業の事業主や従業員、そして町内に所有する不動産などを契機に町内に通う元住民である。これらをそれぞれ①町内在住民、②町内在企業、③通い町衆⁹⁾とする。つまり町内会とは、おなじ町内に住む人々によって構成される地縁をもとにした組織のことを指すが、保存会は、町内在住のみならず町外の人が参加することのある¹⁰⁾、祭礼によって関係づけられる祭縁の組織である。

①の町内在住民は、長く町内に居住する既存住民であり、町内会構成員でもあり、祭礼に中心的にかかわる可能性が高い人々である。②の町内在企業の場合、企業に所属する全ての社員が保存会に加入するわけではない。鶏鉾の事例にあるとおり、基本的には会社から一人の代表が保存会に参加し、運営にかかわる。そしてこのような人々が、祭礼時期にはちまき巻き作業などの手伝いや祭礼当日の町会所前での混雑整理などに社員たちを動員してくることもある。③の通い町衆は、町内在住ではない(空間的には町外であり、町会所からは離れている)が、かつて町内に住んでいた、という過去を背景に「なじみ」として祭礼のあり方に大きく関与している人である。また、夜間人口ゼロとなった山鉾町では、町内との関係は全くなかったものの(元住民ではなくても)、保存会に参加し、山鉾町の祭礼の運営にかかわる、理解や意欲のある人々も見られる¹¹⁾。全ての山鉾町に町内在企業や通い町衆がいるわけではないが、山鉾保存会に町外の人々が参加している例は多く、山鉾保存会を構成するメンバーは複合的である。

加えて、実のところ、近年多くの山鉾町で増え、かつ人口減少に歯止めをかけているのは、山鉾町内に新しく建設されたマンションの入居者たちである。祭礼に関する人手不足への対応から、マンション住民を積極的に祭礼に受け入れ(たとえば太子山町)、それが既存住民との関係を深めるきっかけとなっている町もある¹²⁾。しかし、祭礼と共有財産の保有・維持を目的とする保存会への新住民の加入については、制限を設ける町も多く、実際には山鉾町内在住ではあっても祭礼への日常的なかわりも少なく、祭礼の企画にかかわる保存会へは加入できない(しない)人々もいる。マンション住民を町内会

や保存会に受け入れるか否か、元住民を保存会のメンバーとするか否かの判断は町によって異なる。前者の場合は、マンション住民を祭の即戦力と考える町もあれば、持続的・理解的態度が期待できないと考える町もあり、後者の場合、祭は町内という地理的範囲内のものと考えられる町もあれば、それを越えるところに可能性を見いだす町もあるように、その選択には、各町のおかれた状況が反映されている。そして、これらのメンバー選択については担い手の確保も保存会によって決められることである。

保存会のなかで役割を果たすためには、運営に携わっているという十分な自覚が必要であり、それは K 氏のいう「(財団に) 入ったらきっちりやってもらわなあかん」という言葉に如実に表れていた。町内のご神体などの「もの」の具体的な動かし方にはじまり、町内に伝わる祭礼の仕組みやしきたりも含めて山鉾祭礼を維持し、そのための執行・運営を担う次世代の人材を作り出していくことも保存会の役割といえる。

2-3 山鉾全体の均衡を目指す「山鉾連合会」

祇園祭山鉾連合会は、保存会の集合体として組織されている。大正12(1923)年に組織され、平成4(1992)年に財団法人化した。再び鶏鉾保存会理事長 K 氏の話をもとに連合会の役割について触れる。

ちまきづくりに関しては、作ったものを連合会自体に納めている人がいる。相当の数である。ちまきづくりの伝手を持たない山鉾の分をいくつか、いくつと連合会が一括して頼む(ので、納入先も連合会となる。連合会が仲介している形である)。連合会の理事のなかにはボランティア系(担当)理事もいて、ボランティアも連合会に頼んでおけば調達してくれる。鉾の修理に関してもそうである。各山鉾では、懸装品などの修理は、自分たちで勝手にはできないことになっており、復元修理をやりたいときにはまず連合会の専門委員会へ伝えて(検討をして)もらう。

連合会の理事会は、お祭のない時でも月一回やっている。「一回では片づかない問題などもありますのや…」今、連合会(の会合)での話題は、公益財団法人化のこと、それから現在休み山になっている「大船鉾」の再興のこと、後祭の分割についてである。(鶏鉾町保存会理事長 K 氏 (78歳) 談)

山鉾連合会は、それぞれの山鉾町が持つ個々の課題と山鉾町全体にかかわる課題双方への対応を行う。

まず、山鉾町個別の課題への対応とは、ボランティア

や請負の仲介、山鉾に使用される部材や装飾品の修復申請、資金の調達や分配など、人、もの、そして資金に関することである。K氏の話から、連合会が祭準備の一つであるちまき作りの一括請負、山鉾巡行当日の曳き手および昇き手ボランティアの一括調達を行っていることが分かる。懸装品や山鉾の復元修理や復元新調は、国庫からの補助金交付（金額）にかかわる問題を含むため、それらを事前に審議する専門委員会へのパイプ役となっている。また、祭礼を維持するための莫大な費用は、基本的には各山鉾保存会が自ら賄っていくものであるが、それに加えて京都府や京都市他の諸団体から入る祭礼運営資金としての補助金は連合会が受け取って各山鉾町へ配分する。各山鉾町が抱える課題に対する連合会の調整や対応は、全ての山鉾町ができるだけ同じ条件のもとで山鉾巡行を実現できるように配慮するものである。

他に連合会は、山鉾祭礼全体にかかわる制度や企画についても議論や決議、段取りなどを行う。たとえば、現在、連合会では、1.後祭の復活、2.休み山の再興、3.公益財団法人化が話題になっており、これらをどうするか、情報を共有しながらどのように進めていくかが話し合われている。後祭の復活は、現在1日だけの山鉾巡行を、もともとの形である前祭と後祭に再分割し、かつてのようにそれぞれ神幸祭と還幸祭に合わせた2日間の巡行祭礼に戻す¹³⁾という企画が具体化しつつあるというものであり、休み山の再興とは、元治の大火（1864年）によって焼失し、これまで再興できずにきた大船鉾を再興させて巡行に加えるというものである。後者は大船鉾のある四条町にとっての個別の問題でもあるが、後祭の復活も休み山の再興も山鉾祭礼全体のあり方、将来にかかわるものであり、全体としての構想や段取りが必要となるため、他の山鉾町にとっても関心の高い話題である。最後の山鉾の公益財団法人化をめぐるのは、山鉾連合会理事長Y氏の話をもとにまとめた。

（全ての山鉾町で公益財団法人化を目指すのは）遠い将来、法人格を持つところと持たないところ（町内）が（自治体からの補助金などをめぐって）区別される理由になる（理由になりかねない）。そうなると困るので、皆（全ての町内が）同じ立場、今享受している権利や義務関係を将来永続的にするために、長いものに巻かれておこうということであり、（現在）一般財団法人になっていないところ、任意団体は財産を持ってない。個人名義にしなくてはならないのである。（法人化していないところは）町内在住者から町費を集めることによって（祭の）経費を捻出している（状況であ

る）。（山鉾連合会会長 Y氏（74歳）談）

このように、公益財団法人化は、将来的にどの山鉾も欠けることなく、全ての山鉾町が足並みを揃えて巡行に参加できるようにすべきであるという連合会（そしてそれは連合会長自身）の意志の現れであり、そのための手段である。公益財団法人化は「財団と町内の関係をもっと厳しくするだろう」という意見も聞かれたように、現在の祭礼運営やその仕組みをさらに変えていくことになるであろうが、目に見える祭礼の形はこれまでどおり維持されていくのであろう。

K氏のいうように、一回の会議では片づかない問題も多く、会合は祭礼の季節以外でも月1回の割合で開催されている。各保存会に個別の事項から山鉾町全体の事項まで、さまざまなことを企画、決定、運営し、それによって各山鉾町の企画や運営をオーソライズし、確かなものにする団体が山鉾連合会である。

これまで、山鉾保存会を中心として祭礼に関与する人々と諸集団について述べてきた。そこには山鉾を「建てて、動かす」ためのあらゆる構想・企画が立てられ、それに必要な人、もの、資金を確保すべく調整・段取りを行うことで結ばれる人々の関係があることを確認した。それは祭の基点となる町会所への近在性によって特徴づけられ、比較的、日常的・持続的な関係を維持しやすい環境にあり、祭礼期間以外でも祭礼をめぐる行き来する関係である。かつては全て町内在住の人々によって行われていた祭礼の構想・企画にかかわる活動は、現在、町内在住ではなくともかつての縁から祭礼に参加する通い町衆や、住民ではないが山鉾町内に店舗を構えているという関係から祭礼に参加する企業によっても担われていた。そして、山鉾連合会は各山鉾町の企画・運営上のバランスをとるための調整を行い、山鉾町全体としての祭礼の遂行を目指そうとしていた。これを企画・運営をめぐる祭縁と呼ぶ。

3. 祭礼で実動する人々と諸集団

ここでは、町外に広がる祭礼維持のための祭縁集団について考察する。具体的には、山鉾建てを担う人々の集団「作事三方」を取り上げ、祭りの主役である山鉾がどのように組み立てられるのかを確認しながら、彼らの仕事内容と祭へのかかわり方を記述し（3-1）、祭礼期間中に彼らが作業を遂行する上で自らの技能とその実動を通じて取り結ばれる関係について考察する（3-2）。

3-1 作事三方の仕事と祭へのかかわり

年一度の祭礼に合わせて、山鉾町外や京都市外、ときには府外から各山鉾町に集まり、巡行の中心となる山鉾を建て、巡行当日には鉾に乗って、鉾を動かし、巡行を誘導する技能者集団がいる。これが作事三方であり、山鉾町の祭礼には不可欠の集団である。以下、彼らの仕事内容と巡行当日の役割について記述する。作事三方は、作業の推移に合わせて①「手伝い方」と②「大工方」、③「車方」の三つの集団から成る。時間差でそれぞれが、祭の基点である町会所前の鉾建て現場に集合し、作業に取りかかる。

①の手伝い方は、巡行の一週間ほど前、祭礼期間中、作事三方のなかでは一番早く町会所にやって来て、収蔵庫から鉾建て用の部材を運び出すことから作業を始める。山鉾にもよるが、およそ10名前後で山鉾下部の胴組部分を組み上げる作業を行う（写真2参照）。山鉾は釘を一本も使用しない「縄がらみ」（写真3参照）という特殊な方法で鉾を組み立てていくため、特殊な技能を必要とする。手伝い方の作業はこの縄を巻く作業が中心となる。彼らの普段の仕事は鳶職であることが多い。山鉾建てにかかわる彼らの仕事は、櫓組（山の軸組の組立）、縄がらみ、そして真木立ての作業までである。巡行の終了後は、山鉾を解体して部材を収蔵庫にしまう作業を行う。

しかし、作事三方の仕事は、ただ鉾を建てるだけではない。巡行の当日は、自分たちが建てた鉾を動かす仕事を担っている。手伝い方の場合、鉾の前に宰領となる頭かしらを含む2名が鉾前部の石持ちの上に乗る、山鉾の進行方向を90°回転させる辻回しではさらに2名が加わって（合計4名で）音頭取りを行う。曳き鉾、曳き山の進行、停止、方向転換の合図を、掛け声と扇子で車方や曳き手たちに伝え、指揮する役目を担う（図2の音頭取り参照）。

②の大工方は、7～8名で、手伝い方の組み上げた胴組の上に、山鉾の二階から上の部分となる床、手摺り、柱、天井、屋根などを組み立てる（写真4参照）。手伝い方の真木立て作業が終了する頃に町会所の前にやってきて、作業に取りかかる。傷んだ部品を修理することもある。彼らの普段の職業は大工であり、作事三方のなかでは一番専門的な仕事といわれる。大工方の説明にはしばしば「職人」や「専門職」という言葉が聞かれる。

巡行当日は、「屋根方」として4人が屋根の上に乗る（図2の屋根上を参照）、障害物（たとえば電線の調整）などに注意しながら、真木の動揺を加減し、鉾全体のバ



写真2 手伝い方による鉾建て（筆者撮影）



写真3 縄がらみ（筆者撮影）



写真4 屋根方の作業（筆者撮影）

ランスをとっている。大工方の棟梁は、鉦の傍に徒歩で付き添い、危険防止にあたっている。

③の車方は、12名前後で、手伝い方が車軸をつけたところに、収蔵庫から車輪を持ち出し、手伝い方と共同で車輪を取り付ける作業を行う。

巡行当日は、「車方」としてどの山鉦でも10名前後が鉦の舵取り役を担う。デコやカブラといった木製の道具を車輪に噛ませてカジを取ったり車輪を滑らせたりする人、カケヤといわれる道具でブレーキをかける人などの役割を分担し、巡行中は常に鉦のそばに付き従い、辻回しを中心に鉦の進行調整、方向転換などをする。

見てきたように、作事三方の作業は、手伝い方、大工方、車方それぞれで必要とされる技能や作業が異なり、また巡行当日も違った役割を担うことになるが、鉦を建てて、動かし、祭礼を遂行させるという目標に向かい、山鉦祭礼の維持に対して技能とその実動という働きによってかかわっているという点で共通した人々、集団である。

3-2 裁量性をもつ作事方 ——手伝い方の祭礼期間の事例から——

京都市内の鳶・土工業（創業1845年）七代目のT氏（52歳）は手伝い方の頭である。T氏による手伝い方の祭礼期間についての話を以下にまとめた。

〔7月1日〕吉符入りの日：T氏は八坂神社に一人で詣でて鉦建ての無事を祈る。

〔7月10日～12日〕鉦建て当日：足場やコーン、縄がらみ用の縄を持参して現場へ行く。縄は前もって梱包屋に注文しておく。これも鉦建てにかかわる仕事の一つである。鉦を建てている最中、町内の人何人か時折来て声をかけて来るが、ほとんどは現れない。休憩用のお茶が用意される。鉦建ては、毎年5～6人で鉦町へ出向いて作業を行っている。それ以外に、鉦町内の人ではないが、市内在住の祭好きのサラリーマンが2～3人、手伝いに来て鉦建てに参加している。彼らは鉦建ての日は仕事の休みを取ってくる（鉦の解体については日が合うときのみ）。

〔7月17日〕巡行当日：朝9：00の鉦出発に合わせて町会所に集合する。T氏が鉦に乗り、扇子を持って音頭取りをする。かつては町内の人々が曳いていた鉦だが、近年はボランティアになった。そのためか、町内の人々が曳いていたときよりも音頭取りと鉦曳たちの息が合っていないと感ずることがある。巡行の順番によるが、鉦は午後の2時～3時には町内に戻る。帰って

すぐに鉦を飾る懸装品を取る作業が始まり、屋根の解体、車輪をはずす作業が続く。当日の片づけはこまめで、終了後、「町内会での打ち上げはあるかもしれないが」、作事方はそのまま撤退する。

〔7月18日〕解体作業：前日に残された骨組みの解体は朝から始まり午後3時～4時頃に終了する。その後、町会所にて雑談や反省会がある。手伝い方、大工方、車方のそれぞれの親方も参加し、町内の人たちと一緒に、巡行についての反省点や気づいたことなどを述べ合う。これでその年の祇園祭にかかわる仕事は全て完了であり、次の年の夏まで鉦町とのつきあいはほばない。ただ、鉦の部材新調や修理に関して作事方から意見や提案をすることもあり、たとえば、部材の一部である石持を平成2年頃に新調した際、木の選定の際にはT氏も同行した。

〔鉦町との関係〕戦前に祖父の代から鉦建ての手伝いを引き受けている。きっかけは祖父の前に鉦町の手伝い方であった同業者が辞めることになり、祖父それを引き継いだことで今に至る。

〔町内（保存会）との契約〕保存会と契約を結んでおり、報酬がある。しかしそれよりもむしろ祇園祭の鉦建てに参加しているという誇りが強い。

事例をもとに、①作事方の空間的・時間的なかわり方、②作事方メンバーにみる多様性と裁量性、③技能を通した信頼と社会関係（祭縁）、④それを支える伝統について記述していく。

まず、吉符入りの日の神社詣で以外は、鉦の建て始めから連日作業が続く。つまり、作事方の人々は自らの技能をもって、祭礼にとってもっとも重要な山鉦に実際に働きかけて鉦を建て、動かすことが最大の役割である。そこには事例のように、手伝い方であれば鉦建て前の足場や縄などの事前準備も含まれる。また、部材の老朽化を指摘したり、交換を提案したりすることもある。作事方の人々は自らの「技能」と「実動」によって祭における社会関係、祭縁を結ぶのである。

これら作事方の人々が普段生活の基盤としている場所は町外や市外であることが多く、時には府外から来るものもある。T氏の事務所は比較的山鉦町から近い市内ではあるが、山鉦町外である。T氏と同じ鉦町の車方の親方は市内在住ではあるが、T氏よりも鉦町から遠く、また鉦建てにかかわるようになった父親の代の前に鉦建てを請け負っていたのは滋賀県の人だったという。必然的に山鉦（町）とかかわる時間は少なく、その関係は祭礼期間に集中的かつ限定的なものとなる。T氏の事例のように、祭が終わればその年のその関係は終わりである。

また、祭礼期間中も必要最小限のかかわりであり、鉾建て中も解体時も町内や保存会の人々が実際に手伝うということはない。しかし、余計な関係を持たないことが直ちに関係の希薄さを示すものでもない。むしろ、技能的なことやそれによる実動に関しては一切が作事方に任されており、彼らの作業に関する裁量の幅は広い。その裁量の一つには作事方によるメンバー構成（人集め）がある。次は鶏鉾の保存会理事長による鶏鉾の作事三方のメンバーについての話である。

どこの鉾でも不思議に…大工さん以外は別ですけどね、（自分のところの）手伝い方さんはもうほんまのとび職ですよ。ね。（でも）よそさん（他の山鉾町）なんかは手伝い方のなかでも左官屋はいはるわね。もういろんな職業の方が混じってやっておられるわけで…。酒屋の大将がいはるんですわ。わたしとこのでも、車方のなかで、私知らなんだんですけど、この間、去年でしたかね、そこの大将が車方の手伝いに来ている（市内から）って聞いて…（驚いた）。（略）わたしとこの車方の親方は水道屋さんだもんね。（鶏鉾町保存会理事長 K氏（78歳）談）

この内容には注目したい点が二つある。一つは、高い専門技術の必要な大工方を除けば、作事方には多様な職種の町外の人々が技能をもとに実動するものとして祭に参加しているという点である。T氏が率いるメンバーのなかには事務所の者だけではなく、市内在住のサラリーマンがいた。彼らは祭好きで、当日はわざわざ仕事の休みを取って鉾建てに参加しているという。注目する二つ目の点は、作事方の親方たちが作業を采配するだけでなく、これら多様な作事方の構成員を集め、メンバー構成も彼らの裁量に任されているという点である。ゆえに、上記の話のなかで、車方に酒屋の主人という「意外な」職種の人が参加していたことにK氏が驚いていたが、これは山鉾祭礼の企画・運営を行う保存会の代表でも作事方にどのようなメンバーがいるのかは、特に明確には把握していないということであり、それはまた実動に関する作事方の裁量性の高さと同時に、彼らへの信頼の高さもうかがわせるものである。

確かに、保存会と作事三方の間には金銭的契約があり、作事方はこれを請負仕事として行い、いくらかの報酬を受ける¹⁴⁾。しかし連合会理事長のY氏は、実際の山鉾町と作事三方との関係について、町内も「…その関係を大事にしてきました。大事にしてきたので、この祭は下支えができていた」のだと述べている。特に車輪のつ

く曳き山や鉾については、「町内の住民が手伝える規模ではな」く、作事方は「我々にとって非常に貴重な人たちです。そういう特殊な技能者に任さないことにはあの大きく重い部材を（倉庫から）持ち出し、組み立てるなんてことはとても…町内ではできるような規模ではありません」と話す。この言葉からも分かるように、そこには大きな信頼が存在する。

そして、この信頼関係の理由の一つが「長らく」の関係にあるということ、つまり「世襲」もしくは「世襲に近い形」によって成り立ってきたことにある。世襲に近い、というのは、「息子（が次ぐというの）でなくとも、親方の息のかかったところにバトンが渡されているということ」である。先の事例に挙げたT氏の場合も、仕事を請け負っているのは祖父の代からであるが、祖父は以前担当していた同業者から引き継いだのであった。どこの作事方も山鉾町との関係は長く続いているところが多く、毎年同じ所が請け負うのが慣例となっている。ただし、世襲制が基本とはいえ、先に見たように、構成メンバーはさまざまであり、多少「ボランティア的な」人も加わっている。しかし、この場合、この「ボランティア的な」人々に、縄がけ技術などを習得してもらい、将来長らえていく（次世代を育てる）ような配慮もあるという¹⁵⁾。集められる人々はあくまでも伝手のある（つきあいのある）「仲間」を誘うという形であり、全くの他人を集めるボランティア募集という意味ではない。

実際に「鉾を建てて、動かす」だけではなく、鉾建てに必要な材料や道具を準備し、実質的に必要な人手を集め、さらに必要な技の将来的維持も考える。つまり技能とその実動のための人、ものを確保し動かすことが彼らの役割であった¹⁶⁾。

以上の3.では作事三方を対象にして祭礼に関与する人々と諸集団について述べてきた。そこでは、山鉾を建てて、動かすために、必要な技能を身につけた人々があるゆる実動・実行を行うことで関係が結ばれ、祭礼が維持されることを確認した。彼らは、町会所を基点とした空間的な位置からは日常的関係を維持しやすい環境にあるとはいいがたく、全くといってよいほど祭礼期間のみの集中的・限定的な関係しか取り結ばれていないのである。しかし一方で、祭礼期間中は町会所前の鉾そのものに取り付いて集中的にかかわっており、さらに、そこにある関係が彼らの持つ技能とともに世襲的に受け継がれてきたという点では、山鉾町との信頼を前提にした伝統的な関係が存在するといえる。近年その仕組みが変容し

つつある（注16を再び参照）ことは確かであるが、祭礼における技能による実動の必要性はこれからも変わることはないであろう。信頼関係を含んだこれらの関係を技能・実動をめぐる祭縁と呼ぶ。

むすびにかえて——若干の考察——

本論文は、祭礼を維持・実現するにあたって結ばれる社会関係を「祭縁」として考察し、そこにどのような関係があるのか、どのような仕組みがあるのか、その全体の概要を捉える図式の提示を目的としてきた。その際、対象となった山鉾祭礼にかかわる人々と諸集団を①祭へのかかわり方、②空間、③時間、④伝統の四つの視点を軸に考察、記述してきた。それらを図化したものが図4であり、これを用いて若干の考察と検討を加えたい。

まず、祭礼の進行・維持にあたっては、①のかかわり方という視点から見てみると、企画（構想）し、運営（執行）する役割を担う人々と諸集団、技能によって実動する役割を担う人々と諸集団の大きく二つに分けられることが分かった。さらにそれを②の空間と③の時間という視点から見てみると、祭礼の進行に際して重要な場となる町会所（祭礼の基点）から近い場所にあり、祭礼時期であるかどうかを問わず町会所へ来る頻度が高く、祭礼に割く時間（割合）の多い人々と諸集団が企画・運営の役割を担っていた。図4の左下に集中した諸集団、山鉾保存会、山鉾連合会などがこれにあたり、これを企画・運営による祭縁とした。そして、同様の視点で見た場合、町会所から離れるほど、祭礼に割く時間（割合）の少ない、祭礼時期に集中的・限定的に集まる人々がお

り、この人々と諸集団が技能・実動面の役割を担っていた。図4の右上に位置する作事方がこれに当てはまり、これを技能・実動による祭縁とした。企画・運営による祭縁と技能・実動による祭縁、この二つの祭縁がそれぞれのところで遂行している内容は全く異なるものの、山鉾巡行という大きな祭礼を不変的に実現させるという至上命題としての目的を共有し、この命題を遂行し、成功させるためには相互に必要不可欠な関係にある。構想と実行の二つの祭縁が相補的に結ばれ、統合されることによって山鉾祭礼は実現するのであり、これら二つによって成り立つ関係を都市的祭縁と呼んでおきたい。なぜなら、ここに述べてきた関係は、町衆の歴史に始まる都市の人々による祭であり、内実が変容したといえども、その形は伝統的側面を持つ一方で、都市の事情とその変化に対応し、そのなかで維持されてきたからである。

今回は山鉾祭礼の考察を今後も継続するための分析枠組みおよび祭礼全体像の提示の試みとして書き起こしたものである。したがって、取り上げた具体的対象はほんの一部であり、情報もまだまだ不十分である。本稿では取り上げなかった祭礼にかかわる具体的諸集団を図4上に置いているが、今後これらにかかわる人々に聞き取り調査を重ね、この枠組みに修正を加えながらさらに詳細な考察・分析を行うことによって、都市的祭礼の現代的局面を捉えていきたいと考える。歴史的にみても町外からの人的・経済的援助はこの祭礼にとって欠かせないものであったし、町外からの協力や援助は、今後の祭礼のあり方を左右する重要な要素となるだろう。さらに今後は、祇園祭が長い歴史のなかでどのようなコミュニティ

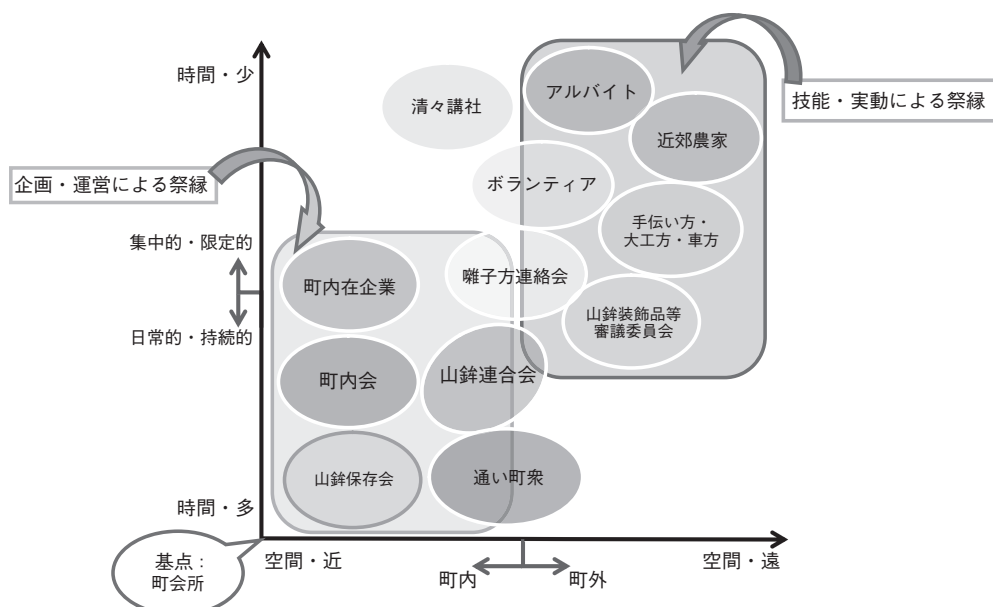


図4 祭縁（山鉾を建て、動かす人々の関係）

や社会関係が構築・蓄積されることによって維持されてきたのか、その変遷についても整理すべきであろう。

最後に、本論文を書くにあたって、インタビューに快く応じて下さった祭礼関係者の皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げたい。

注

- 1) 祇園会の原型である祇園御霊会の始まりは天禄元(970)年といわれる(祇園社の記録では天延二(974)年)。北野社、稲荷社の御霊会などとともに十世紀の御霊会信仰にもとづく祭礼で、天延三(975)年には既に朝廷の主催によって種々の芸能が奉納されている。古代から中世前期の御霊会は、祇園社(現在の八坂神社)の3基の神輿が旧暦六月七日にお旅所へ渡り、同十四日に再び祇園社へ帰っていくというものだった。山鉾巡行はこの両日にあわせて行われた。
- 2) 「祭縁」概念については(谷1994:64)を参照した。
- 3) 現山鉾連合会長Y氏によれば、神輿渡御も山鉾巡行もその担い手は、八坂神社の氏子という点では同じだが、現在、二つの祭礼で動員される人が重複することは全くないという。むしろ山鉾町の人々にとって「神輿組のことは一切わかりません」というのが現状である。
- 4) 天文二(1533)年、天文法華一揆のさなか、延暦寺と結託した幕府の祇園会停止の命令に対して町衆たちが「神事ナクトモ山鉾渡シタシ」と祇園社と侍所の松田頼亮に迫り、神事は中止されたものの山鉾巡行は行われたという。町衆の自治的性格を象徴する話として特に有名である。
- 5) 山と鉾は形によってさらに分類される。「鉾」は、長刀鉾、函谷鉾、月鉾、鶏鉾、菊水鉾、放下鉾、船鉾の7基、「曳山(山ではあるが、見た目は鉾に似て曳く形)」には、南観音山、北観音山、岩戸山の3基、「昇山」には、郭巨山、役行者山、黒主山、鯉山、山伏山、白楽天山、八幡山、保昌山、木賊山、伯牙山、芦刈山、占出山、霞天神山、浄妙山、橋弁慶山、鈴鹿山、孟宗山、蟬螂山、油天神山、太子山の20基、古式の鉾を今に伝えているといわれる「傘鉾」に四条傘鉾と綾傘鉾の2基がある。他に、過去の戦禍によって焼失したまま現在も巡行していない「休み山」(もしくは「焼山」といわれる3基の山、大船鉾、布袋山、鷹山があり、現在は巡行こそしないものの、祭の宵山期間には焼失を免れた懸装品やご神体などを町会所(もしくは町民の家)に飾り付け、訪れる人の目を楽しませている。
- 6) 寄町制度については(富井1971)に、清々講社の成立とその内容については(富井1979)に詳しい。
- 7) ただし、現在全ての山鉾町が町会所を所有しているわけではない。戦後の混乱期に町会所を失った町もあり、このような町では、祭の期間、町内の誰かの家を借りて拠点としている町もある。またその場合には、保存会の会員から保存会費を徴収し、それを主要財源としている。
- 8) いくつかの山鉾町が法人化できずにきた理由は、町家・収蔵庫が事実上町有であっても、登記上個人(もしくは複数人)の共有名義になっていたり、名義人が死亡して相続が複雑化していたりなどの問題を抱えているためである(米山1986:102)。しかし、2012年は、全山鉾町の年内公益財団法人化が目指されており、既に長刀鉾(長刀鉾町)などいくつかの町が公益法人格を取得している。
- 9) 山鉾町のなかでもっとも早く夜間の町内人口がゼロになった(1973年)函谷鉾(函谷鉾町)では、以後、町民ではない人々の手によって祭礼が実施されてきた。鉾町への強いアイデンティティを持ったこのような担い手たちを保存会が「通い町衆」と呼んでいた(京都新聞2011/7/9)ことから、ここでもそれを使用した。
- 10) 町外者の参加を認めていない保存会もあり、他の条件についてもいえることだが、対応の仕方は町によってさまざまである。
- 11) 京都新聞2007/7/2~6「観光・京都おもしろ宣言」に5日間に渡って掲載された祇園祭の担い手に関する記事は、さまざまな立場から祭にかかわる人々についての記述があり興味深い。
- 12) これに関する事例は(田中2008:50-52)を参照した。もっとも、地域コミュニティ再生の観点から書かれたこの論文では、既存住民と新規のマンション住民の関係を深めるにあたっては、祇園祭への参加だけではなく他の行事や活動もあったことが説明されている。
- 13) 昭和41年に前祭と後祭が合同となり、現在の1日巡行の形になるまで、前祭(山鉾23基)が神幸祭の神輿渡御の露払いとして、後祭(山9基)が還幸祭の露払いとして別々に巡行が行われていた。
- 14) 江戸時代には山鉾町と車方の賃金交渉が行われ、鉾建て作業に当たって誓約書が出されていたこと(川嶋2010:51)また、寄付や助力とは異なり、そして寄町でもなく、当該の鉾町とは全く関係のないところから車方として人が出ていることを示す記録もある(川嶋2010:111-114)。
- 15) 北観音山での聞き取りの内容は以下のようである。「最近はそのような傾向で、このごろやたら(ボランティア的参加者が)多い。昔は少人数でやっていたが、今、手伝い方にはかなりの数で、30人ぐらいいて、専門の鳶職はごくわずか。親方の仲間衆≠鳶、この傾向を多少加味(しているのか)?うちの親方は(そのあたりを)組み込んでいて、ボランティア要素が高いので多少難しいが、縄掛け技術を習得させて将来に長らえていくよう配慮している。」
- 16) これまで作事方では基本的な形であった「世襲」に変化があらわれている。本論で見てきたように、これまで手伝い方と大工方、車方の作事三方にそれぞれ鉾建ての作業を依頼するのが通例だったが、最近ではこれを一つにまとめる(一人の親方に全てを任せる)、工務店に

一括して頼む町が増えているという。家を建てるにしても大工、左官、手伝いがまとめて工務店配下になりつつあり、これらの影響であることは十分に考えられる。市内のある工務店はいくつかの鉾建てを請け負っている。また、手伝い方と車方が一緒にいる町がある。つまり現在は、作事三方を三者それぞれ別個に頼んでいる山鉾町と、一括して一人の親方に頼んでいる山鉾町とがあるということである。

引用・参考文献

- 秋山國三・仲村研著，1975、『京都「町」の研究』法政大学出版局。
- 鯨坂学・小松秀雄，2008、『京都の「まち」の社会学』世界思想社。
- 河内将芳，2002、『中世京都の民衆と社会』思文閣出版。
- 川嶋將生，1976、『町衆のまち 京』柳原書店。
- 川嶋將生，2010、『祇園祭 祝祭の京都』吉川弘文館。
- 木村万平著 井口和起監修，2005、『職・住・祭共存のまち 百足屋町史 巻一』南観音山の百足屋町史刊行会。
- 京都市，1971、『京都の歴史2 中世の明暗』株式会社学芸書林。
- 京都市景観・まちづくりセンター，2008、『共有・共用空間活用等によるまちづくり拠点・担い手形成調査報告書』。
- 京都市自治100周年記念特別展「祇園祭の美—祭を支えた人と技—」実行委員会，1998、『祇園祭の美』。
- 五島邦治，2004、『京都町共同体成立史の研究』岩田書院。
- 柴田実，1971，「神社と民間信仰」京都市『京都の歴史2 中世の明暗』学芸書林。
- 高橋康夫・中川理編，2003，『京・まちづくり史』昭和堂。
- 谷直樹・増井正哉，1994，『まち祇園祭すまい—都市祭礼の現代—』思文閣出版。
- 富井康夫，1971，「祇園祭の経済基盤」『京都社会史研究』法律文化社190—249。
- 富井康夫，1979，「維新期の祇園会について」秋山國三先生追悼会編『京都地域史の研究』国書刊行会279—305。
- 林屋辰三郎，1990，『町衆 京都における「市民」形成史』中央公論社。
- 松田元，1977，『祇園祭細見（山鉾編）』京を語る会。
- 真弓忠常，2000，『祇園信仰 神道信仰の多様性』朱鷺書房。
- 三村浩史・リムボン編著，2001，『町衆企業とコミュニティ』高学出版。
- 百足屋町史編集委員会，2005，『祇園祭 南観音山の百足屋町今むかし 百足屋町史巻二』南観音山の百足屋町史刊行会。
- 八木透編，2002，『京都の夏祭と民俗信仰』昭和堂。
- 米山俊直，1986，『ドキュメント祇園祭 都市と祭と民衆と』日本放送出版協会。
- 米山俊直，1986，『都市と祭の人類学』河出書房新社。
- 脇田晴子，1999，『中世都市と祇園祭』中公新書。